

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成 14 年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

北近藤第一地点遺跡 (平 14 地点)

神明前遺跡 (平 14 地点)

咄戸沼遺跡 (平 14 地点)

大袋 4 遺跡 (平 14 地点)

中山東遺跡 (平 14 地点)

谷向遺跡 (平 14 地点)

上ノ前遺跡 (平 14 地点)

館林市教育委員会

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成14年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

- 北近藤第一地点遺跡 (平14地点)
- 神明前遺跡 (平14地点)
- 咄戸沼遺跡 (平14地点)
- 大袋4遺跡 (平14地点)
- 中山東遺跡 (平14地点)
- 谷向遺跡 (平14地点)
- 上ノ前遺跡 (平14地点)

館林市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成14年度に国宝重要文化財等保存整備事業、群馬県文化財保存事業の補助金を受けて実施した館林市内の遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき次のとおりである。地点名は、平成14年度調査であることから、「平成14年度調査地点」とする。

北近藤第一地点遺跡 (きたこんどうだいいちちてんいせき)	中山東遺跡 (なかやまひがしいせき)
神明前遺跡 (しんめいまえいせき)	谷向遺跡 (やむかひいせき)
咄戸沼遺跡 (とどぬまいせき)	上ノ前遺跡 (かみのまえいせき)
大袋4遺跡 (おおぶくろよんいせき)	

3. 発掘調査及び資料整理は、館林市教育委員会が主体となり実施したもので、調査組織は次のとおりである。

教 育 長	大塚 文男				
教 育 次 長	早川 勝敏				
主 管 課	文化振興課				
文化振興課長	中村 慎六				
文化財係長	阿部 博				
学 芸 員	岡屋 英治(副担当)	阿部 弥生	原 幸恵	吉田 紋乃	
主 事	釜島 美貴				
主 事 補	打木 洋輔(担 当)				

4. 作 業 員

石井 悦雄	坂田 岩吉	高瀬 広	小林 俊彦	大澤平八郎	鈴木 正勝
小林 浩子	川島 範子				

5. 調査による出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。
6. 本書の編集・執筆については、打木、小林、川島が中心となり行った。
7. 調査の実施から本書の刊行にあたり、下記の諸氏、諸機関のご協力をいただいた。ここに記して感謝申しあげる次第である。(順不同、敬称略)

石塚 昭治	池田 勝治	中里重太郎	野村 良勝	半田惣一郎	栗原 隆
早川 登	斉藤亀太郎	山田 春子	飯塚 慶二		
ジェイフォン株式会社	谷田川北部土地改良区	社会福祉法人山びこ会			

〈目 次〉

例 言

目 次

図版目次

写真目次

第 1 章 館 林 市 の 環 境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	2
第 2 章 調 査 の 概 要	4
1 北近藤第一地点遺跡	4
2 神明前遺跡	8
3 咄戸沼遺跡	12
4 大袋4遺跡	14
5 中山東遺跡	17
6 谷向遺跡	21
7 上ノ前遺跡	24

参 考 文 献

抄 録

〈 図 版 目 次 〉

第1図	館林市の位置	1
第2図	館林の地形概念図	3
第3図	調査遺跡	3
第4図	北近藤第一地点遺跡 周辺の遺跡	4
第5図	北近藤第一地点遺跡 トレンチ配置図	6
第6図	北近藤第一地点遺跡 トレンチ平面図	6
第7図	北近藤第一地点遺跡 出土遺物実測図	7
第8図	神明前遺跡 周辺の遺跡	8
第9図	神明前遺跡 トレンチ配置図	10
第10図	神明前遺跡 トレンチ平面図	10
第11図	神明前遺跡 出土遺物実測図	11
第12図	咄戸沼遺跡 周辺の遺跡	12
第13図	咄戸沼遺跡 トレンチ配置図	13
第14図	大袋4遺跡 周辺の遺跡	14
第15図	大袋4遺跡 調査地掘削図	15
第16図	大袋4遺跡 調査地平面図	16
第17図	大袋4遺跡 出土遺物実測図	16
第18図	中山東遺跡 周辺の遺跡	17
第19図	中山東遺跡 トレンチ配置図	19
第20図	中山東遺跡 トレンチ平面図	19
第21図	中山東遺跡 出土遺物実測図	20
第22図	谷向遺跡 周辺の遺跡	21
第23図	谷向遺跡 トレンチ配置図	23
第24図	上ノ前遺跡 周辺の遺跡	24
第25図	上ノ前遺跡 トレンチ配置図	25

〈 写 真 目 次 〉

写真 1	北近藤第一地点遺跡	調査前景観	5
写真 2	北近藤第一地点遺跡	調査風景	5
写真 3	北近藤第一地点遺跡	トレンチ全景	5
写真 4	北近藤第一地点遺跡	遺構確認状況	6
写真 5	北近藤第一地点遺跡	遺構確認状況	6
写真 6	北近藤第一地点遺跡	出土遺物	7
写真 7	神明前遺跡	調査前景観	9
写真 8	神明前遺跡	調査風景	9
写真 9	神明前遺跡	トレンチ完掘	9
写真 10	神明前遺跡	遺構確認状況	10
写真 11	神明前遺跡	遺構確認状況	10
写真 12	神明前遺跡	出土遺物	11
写真 13	咄戸沼遺跡	調査前景観	13
写真 14	咄戸沼遺跡	調査風景	13
写真 15	咄戸沼遺跡	トレンチ完掘	13
写真 16	大袋 4 遺跡	遺構確認状況	15
写真 17	大袋 4 遺跡	遺構確認状況	15
写真 18	大袋 4 遺跡	出土遺物	16
写真 19	中山東遺跡	調査前景観	18
写真 20	中山東遺跡	調査風景	18
写真 21	中山東遺跡	トレンチ完掘	18
写真 22	中山東遺跡	遺構確認状況	19
写真 23	中山東遺跡	遺構確認状況	19
写真 24	中山東遺跡	出土遺物	20
写真 25	谷向遺跡	調査前景観	22
写真 26	谷向遺跡	調査風景	22
写真 27	谷向遺跡	トレンチ完掘	22
写真 28	上ノ前遺跡	調査前景観	25
写真 29	上ノ前遺跡	調査風景	25
写真 30	上ノ前遺跡	トレンチ完掘	25

第1章 館林市の環境

1 地理的環境

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口8万人ほどの地方都市である。

市域は、東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60km²である。北は一部を除き渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町にそれぞれ接している。明和町の南には利根川が東流し、県境となっている。県庁所在地である前橋市までは約50km、首都東京（台東区浅草）へは約65kmの距離にあり、首都圏との結びつきも強い。

群馬県の東南部は「邑楽・館林」地方と呼ばれ、群馬県のなかでは低地に位置している地域である。館林市の標高は、15m台（大島町東部）から32m台（高根町）であり、おおむね平坦であるといえる。

本市の地形を概観してみると、その地形は、大きく「低台地」と「低地帯」に分けることができる。市域のほぼ中央部に「低台地」が東西に延びるように所在し、その周辺に「低地帯」が広がっている。

この「低台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地であり、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から館林市高根に至る台地の北側に沿って、わが国最古の砂丘のひとつである埋没河畔砂丘が走っており、本市最高標高点はこの上にある。

「低地帯」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地である。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼をはじめ大小の沼や湿地帯が形成されている。

こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向がみられ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。

「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は、沖積低地へ延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川から城沼へかけてのもので、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、他にも茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴のひとつになっている。



第1図 館林市の位置

2 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、145ヶ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）には、そのうちの144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡3遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡は0（弥生時代の遺物を採取できた遺跡1遺跡）、古墳時代～平安時代の遺跡（土師器の出土した遺跡）96遺跡（うち縄文時代の遺物も採集できる遺跡は23遺跡）、古墳は17遺跡（古墳総数25基）、中世生産址1遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址2遺跡である。（ただし、複合した時代の遺物散布が見られるため、その中心となると考えられる時代でまとめたものである。）

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。

館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のようになる。

《旧石器時代》

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向をみせる。邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる内陸河畔砂丘（自然堤防）上に、その多くが確認されている。

《縄文時代》

この時代になると、遺跡数が増えるとともに洪積台地上に営まれるようになる。前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。後期以降は遺跡数は減少し、その所在は、台地の斜面から微高地に移る傾向がある。後・晩期の包含層等は低地（沖積地）におよぶ。

《弥生時代》

弥生時代の遺跡として確認されたものはないが、微高地や台地の斜面等で、遺物等がわずかに確認されている。

《古墳時代》

前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在することが多く、この傾向は、弥生時代の遺物散布に似ている。

中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。

後期には、遺跡数は増大し、台地上の平坦部に所在する場合が多い。

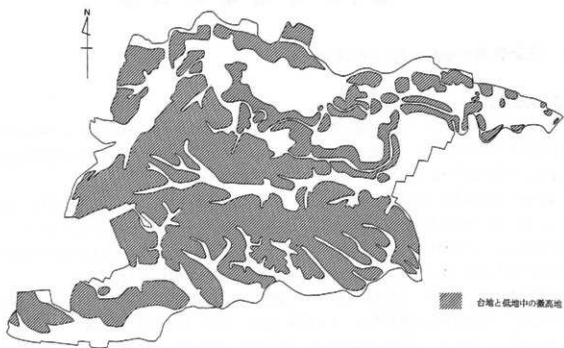
墳墓としての古墳は、25基が残存している。古墳群が2ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが、谷や谷地等をみおろす洪積台地上に所在している。

《奈良・平安時代》

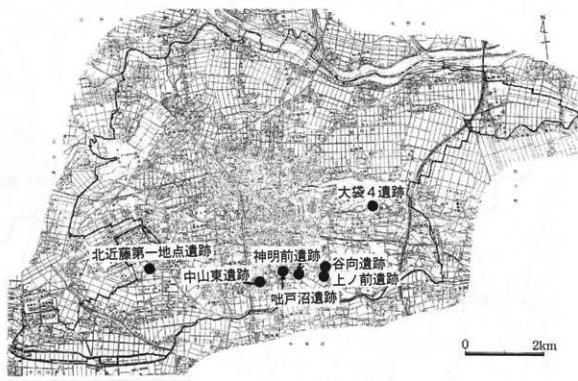
この時代の遺跡は急増する。台地の内部や全面で遺物の採集ができることから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれてきたことを示唆している。

《中世・近世》

この時代の城館址については、伝説的な要素が多く実体ははっきりしないが、中世末には館林城が築かれ、現在の館林市の基礎となった。



第2図 館林の地形概念図



第3図 調査遺跡図

第2章 各遺跡の概要

1 北近藤第一地点遺跡（平14地点）

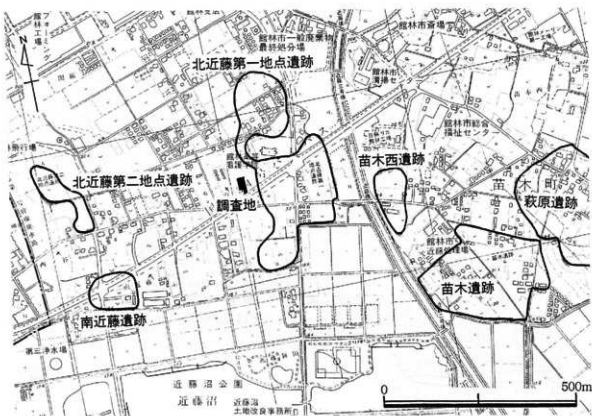
【立地と環境】

北近藤第一地点遺跡は、館林の南西部、東武鉄道小泉線「成島」駅の南西方向約2,000mに位置する縄文時代から古墳時代にかけての遺跡である。本遺跡は、館林市苗木町字北近藤および南近藤地内に所在しており、同北近藤地内に存在する「第二地点」遺跡と区別される。

本遺跡の発掘調査はこれまで数回実施されており、古墳時代を中心とした住居址や遺物が数多く検出されている。今回の調査地は、遺跡範囲の西方に位置し、平成9年度調査地点の西側にあたる。

地形的には、近藤沼を形成する開析谷の北岸にあたり、比較的平坦で広い台地の東部に位置している。遺跡地の現在の標高は約21mで、周辺の低地（近藤沼）との標高差は約3mである。

本遺跡の周辺には、同じ台地上に、伝右エ門遺跡（縄文、古墳時代）が所在しているほか、近藤沼周辺の台地上に、北小袋遺跡（縄文時代）、小袋遺跡（縄文、古墳、平安時代）、苗木遺跡（古墳、平安時代）、苗木西遺跡（平安時代）、南近藤遺跡（古墳、平安時代）、北近藤第二地点遺跡（土師）などが分布している。このうち、既往調査により住居址等が検出されているのは、伝右エ門遺跡（古墳時代）と南近藤遺跡（古墳、奈良時代）である。



第4図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、館林市苗木町字北近藤2563-1 地内における無線機器の中継局及び铁塔新設工事に伴う事前調査として実施した。

上記の土地は、過去における数回の発掘調査の経緯から、地下に遺構、遺物が確認される可能性の高い場所であったことから、開発計画者との合意のもと、遺跡の範囲、遺構等の有無などの確認を目的とした調査を行った。

調査は、開発計画区域内に、敷地の形状に合わせて南北方向に2本のトレンチを設定し、地下の状況を確認した。

調査地の現地形は、南側から北側に向けて低くなっており、表土で約10cmの高低差がみられた。また、旧地形においてはローム層で約20cmの高低差があることが確認された。

1 トレンチでは、南側と中央部から住居址がそれぞれ1軒ずつ（ともに古墳時代）が確認された。

2 トレンチでは、南側から住居址2軒（ともに古墳時代）が、中央部からは土壇3基（時代不明）が確認された。

今回の調査において、開発計画区域内より住居址や土壇等が確認されたことから、埋蔵文化財の取り扱いについて開発計画者と再び協議を行った。その結果、現開発計画は一時中断することになり、確認された遺構等の現状保存を図るため調査地の埋め戻しを行った。また、今後工事を実施する場合には、原因者負担のもと事前に記録保存のための発掘調査が必要になることで合意し、調査を終了した。

なお、今回の調査では、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外から遺構、遺物が確認されたため、その後の手続きにより、同地を北近藤第一地点遺跡の一部として新たに登録することになった。



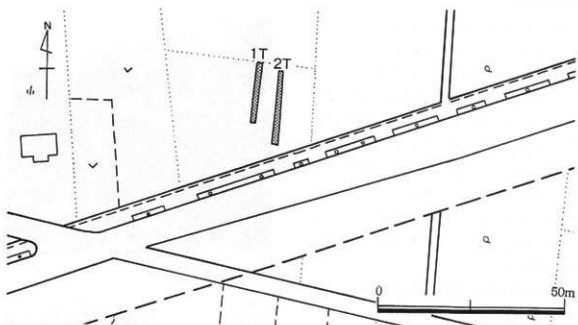
写真1 調査前風景



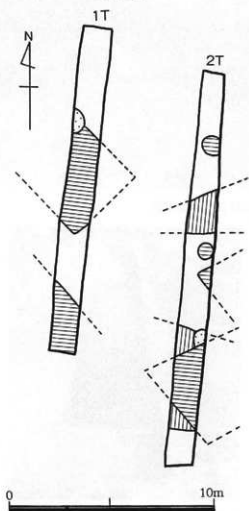
写真2 調査風景



写真3 トレンチ全景 (2トレンチ)



第5図 トレンチ配置図



第6図 トレンチ平面図



写真4 遺構確認状況(1トレンチ)



写真5 遺構確認状況(2トレンチ)

【出土遺物】

今回の調査で、出土した遺物は数十点である。そのなかで、実測、採拓したものを下記のとおり取上げた。

1は縄文土器の破片である。黒褐色を呈し横方向の沈線がみられる。

2、3は土師器の破片である。2は灰色をしており、口縁の破片である。3は底部の破片で、糸切り痕がみられる。

4は両面文様のある張の破片である。表面には葎目、内面には青海波文の叩き目がみられる。

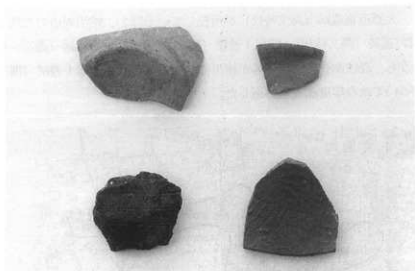
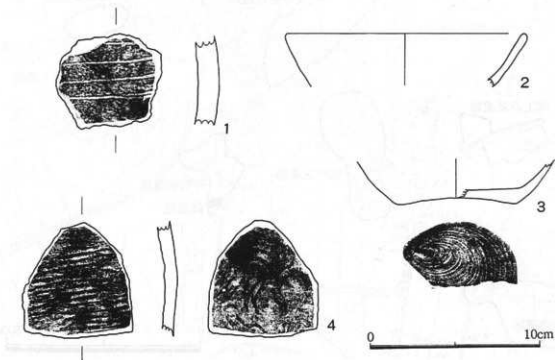


写真6 出土遺物



第7図 出土遺物実測図

2 神明前遺跡（平14地点）

【立地と環境】

神明前遺跡は、館林市の南部、東武鉄道伊勢崎線「茂林寺」駅の東方約1,300mに位置する縄文時代から平安時代にかけての遺跡である。

本遺跡における発掘調査は、これまでに例がなく、今回の調査地は、遺跡範囲の南部に位置している。

地形的には、蛇沼を形成する開析谷の西岸に臨む台地上に位置している。遺跡地の現在の標高は約18mで、周辺の低地（谷田川）との標高差は約2mである。

本遺跡の周辺には、同じ台地上に、大原道東遺跡（縄文時代）が所在しているほか、蛇沼周辺の台地上に、咄戸沼遺跡（縄文時代）、南美園町遺跡（縄文時代）、間堀1遺跡（縄文時代）、間堀2遺跡（縄文、平安時代）などが分布している。このうち、既往調査で住居址等が検出されているのは、間堀1遺跡（縄文時代）である。なお、咄戸沼遺跡については今年度調査を実施した。



第8図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、谷田川北部土地改良事業に伴う事前調査として実施した。

館林市教育委員会では、土地改良事業区域内に所在する6カ所の市内遺跡（林、宮内、神明前、咄戸沼、谷向、上ノ前遺跡）の取り扱いについて、市経済部農村整備課を通じ谷田川北部土地改良区と協議を進めてきた。

平成12年度に林遺跡、宮内遺跡（A区）、平成13年度には宮内遺跡（B区）の試掘調査を実施し、今年度は神明前、咄戸沼、谷向（A区）、上ノ前遺跡の調査を行った。

なお、谷向遺跡（B区）については平成15年度以降に調査予定である。

本調査では、該当する調査地内（堀工町字神明前 171-1）に東西方向に2本のトレンチを設定し、地下の状況を確認した。

調査地の現地地形は、北西から南東に向けて低くなっており、表土で約20cmの高低差がみられた。また、旧地形においても、ローム層で約20cmの高低差があることが確認された。

1トレンチの西側では、攪乱層の中から遺物が出土したため、サブトレンチを設定し調査したところ、住居址1軒（古墳時代）が確認された。

その他、両方のトレンチから、自然層を削る掘り込みがいくつかみられたことから、覆土を除去したところ、近代以降のものと思われる田んぼや水路らしき落ち込みが確認されたが、まとまった遺物を伴うものはなかった。

今回の調査では、1トレンチ西側より古墳時代の住居址1軒と少量の遺物を確認したが、土地改良事業での掘削深度は遺構に及ばず現地保存が行えることから、当該事業執行について支障はないと判断した。



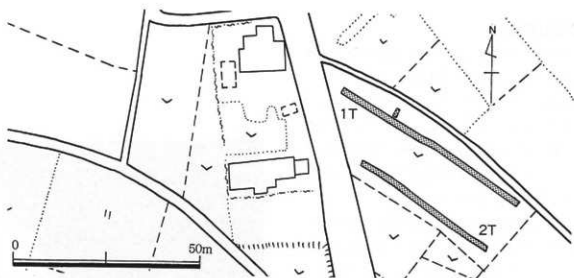
写真7 調査前景観



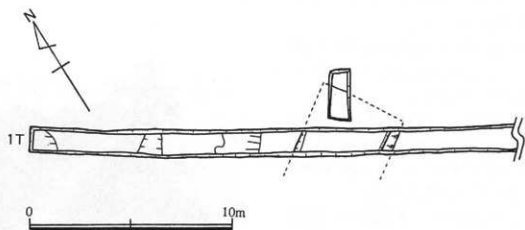
写真8 調査風景



写真9 トレンチ完掘 (1トレンチ)



第9図 トレンチ配置図



第10図 トレンチ平面図



写真10 遺構確認状況(1トレンチ)



写真11 遺構確認状況(サブトレンチ)

【出土遺物】

今回の調査で、出土した遺物は数十点である。そのなかで、実測、採拓したものを下記のとおり取上げた。

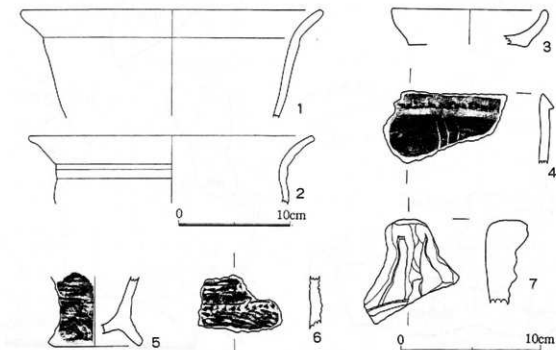
1～2は長胴甕の破片である。ともに口縁から胴部の破片で、1は焼成が良好である。2は裏面が黒褐色をしている。

3は灯明皿の破片である。

4～7は縄文土器の破片である。このうち、4は口唇部で下部に細い隆帯ときざみが見られる。5は上げ底の底部にあたる。6は黒褐色で竹管による深線が見られ、縄文が施されている。7は深鉢口縁部の握手でウンモが混入している。



写真12 出土遺物



第11図 出土遺物実測図

3 咄戸沼遺跡（平14地点）

【立地と環境】

咄戸沼遺跡は、館林市の南部、東武鉄道伊勢崎線「茂林寺」駅の東方約900mに位置する縄文時代の遺跡である。

本遺跡における発掘調査は、これまでに例がなく、今回の調査地は、遺跡範囲の南部に位置している。

地形的には、邑楽・館林台地の南部で、西に茂林寺沼、東に蛇沼をみおろす低台地上の中央部に位置している。また、南方では、茂林寺川や谷田川が東流している。遺跡地の現在の標高は約18mで、周辺の低地（谷田川）との標高差は約2mである。

本遺跡の周辺には、同じ台地上で、西方の茂林寺沼方面に下堀工道溝遺跡（古墳、平安時代）、東方の蛇沼方面に大原道東遺跡（縄文時代）、神明前遺跡（縄文、奈良、平安時代）などが分布している。このうち、既往調査で住居址等が確認されているのは、下堀工道溝遺跡（古墳、平安時代）、神明前遺跡（古墳時代）である。なお、神明前遺跡については今年度調査を実施した。



第12図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、谷田川北部土地改良事業に伴う事前調査として実施した。

本調査に至るまでの経緯は、前述のとおりである（2神明前遺跡参照）。

今回の調査では、当該遺跡に既往の発掘調査例がないことを踏まえ、遺跡の保存状態、遺跡の範囲、遺構等の有無などの確認を目的とした調査を行った。

調査は、該当する調査地内（堀工町字咄戸沼 641-1、687-1）に2本のトレンチを設定し、地下の状況を確認した。

調査地は、ほぼ平坦な地形であるものの、西方から東方に向けて低くなっており、表土で約10cmの高低差がみられた。また、旧地形においては、ローム層で約20cmの高低差があることが確認された。

1 トレンチでは、表土下約90cmのところまでローム層を確認することができた。

2 トレンチでは、表土下約100cmのところまでローム層を確認することができ、西側のローム層からは、水がにじみ出てくる状況であった。

今回の調査では、特筆すべき遺構、遺物等は確認されなかったため、土地改良事業の執行について支障はないと判断した。



写真13 調査前風景



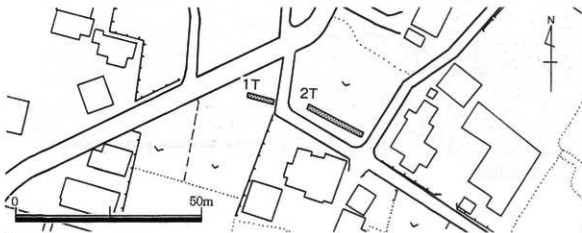
写真14 調査風景



写真15 トレンチ完掘(1トレンチ)

【出土遺物】

今回の調査において、特筆する出土遺物は検出されなかった。



第13図 トレンチ配置図

4 大袋 4 遺跡 (平 14 地点)

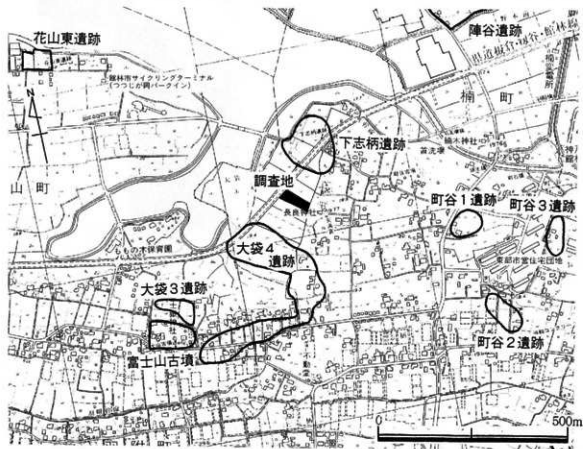
【立地と環境】

大袋 4 遺跡は、館林市の東部、東北自動車道路館林 I C の北西方向約 1,800m に位置する縄文時代から平安時代にかけての遺跡である。遺跡名は、小字名に基づいており、旧宇大袋地内に複数の遺物散布箇所があることから、「大袋 4 遺跡」とした。

本遺跡の発掘調査はこれまで数回実施されており、特に、平成 5 年度に県道「板倉初谷・館林線」道路改良工事に伴って実施された発掘調査では、古墳時代の住居址や遺物が数多く検出されている。今回の調査地は、遺跡範囲の北東方向に位置し、平成 5 年度調査地点の北東側にあたる。

地形的には、邑楽・館林台地を大きく開析する城沼の支谷である、古城沼を東岸に臨む台地上に位置している。遺跡地の現在の標高は約 20m で、周辺の低地（古城沼）との標高差は約 3m である。

本遺跡の周辺には、同じ台地上に、下志柄遺跡（縄文時代）が存在しているほか、古城沼周辺の台地上に、大袋 3 遺跡（平安時代）、大袋 5 遺跡（平安時代）、大袋城遺跡（中世城館）、花山東遺跡（縄文、古墳時代）などが分布している。また、富士山古墳、下志柄古墳、町谷古墳などの古墳も多く所在している。既往調査で住居址等が検出されているのは、大袋城遺跡（古墳、中世城館）と花山東遺跡（古墳時代）である。なお、花山東遺跡については昨年度調査を実施した。



第 14 図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、館林市楠町字下志柄 1938-1、1943-1 地内における保育園の新築工事の際に実施した。

上記の土地は、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲に該当していないものの、周辺には大袋 4 遺跡、下志柄古墳、下志柄遺跡等が所在することから、職員立会いのもと工事を着工したところ、住居址と思われる遺構を確認した。このため、関係者と協議を行い、工事を一時中断し、工事予定地内の確認調査を行った。

調査地は、北西から南東に向けて低くなっており、表土から深度約 50cm のところでローム層が確認された。

また、調査の結果、保育園建設予定地内の北西部より住居址 1 軒（縄文時代）、南西部より土壇 1 基（時代不明）が確認された。

このような調査結果をもとに、再度関係者と協議を行ったところ、工事での掘削深度は検出された遺構に及ばないことが確認され、その他の保育園建設予定地内からは特筆する遺構等は確認されなかったことから、当該工事続行については、支障なしと判断した。

また、その後の工事において掘削深度が深くなる部分については職員立会いのもと慎重に工事を行ったが、特筆する遺構、遺物は確認されなかった。

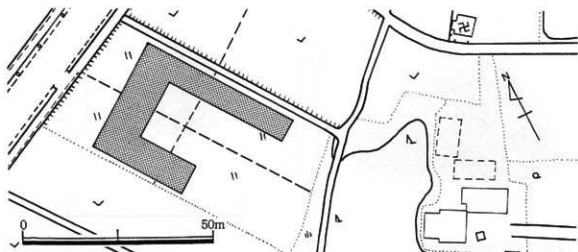
なお、今回の調査では、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外から遺構、遺物が確認された。このため、その後の手続きにより、同地を大袋 4 遺跡の一部として新たに登録することになった。



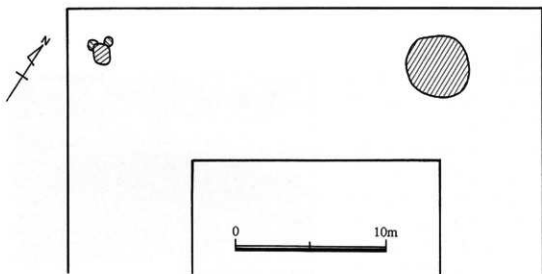
写真 16 遺構確認状況



写真 17 遺構確認状況



第 15 図 調査地掘削図



第16図 調査地平面図

【出土遺物】

今回の調査で、出土した遺物は少ない。そのなかで、実測、採拓したものを取上げた。

1は縄文土器深鉢の破片である。縄文が鮮明である。

2は縄文土器の破片である。太い縄目がみられる。

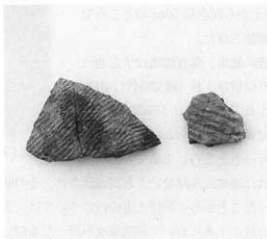
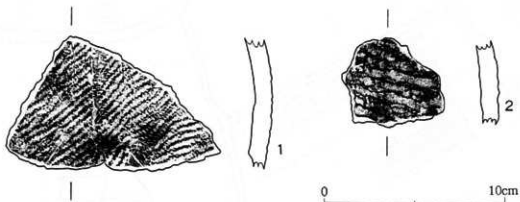


写真18 出土遺物



第17図 出土遺物実測図

5 中山東遺跡（平14地点）

【立地と環境】

中山東遺跡は、館林市の南部、東武鉄道伊勢崎線「茂林寺」駅の東方約200mに位置する平安時代の遺跡である。

本遺跡の発掘調査は、過去に一度行われており（平成2年度）、その調査では特筆する遺構等は確認されていない。今回の調査地は、遺跡範囲の中央部に位置し、平成2年度調査地点の東側にあたる。

地形的には、茂林寺沼を形成する開析谷の南岸に臨む台地の東部に位置している。遺跡地の現在の標高は約20mで、周辺の低地（茂林寺沼）との標高差は約3mである。

本遺跡の周辺には、同じ台地上に前通遺跡（平安時代）が所在しているほか、茂林寺沼周辺の台地上に、笹原遺跡（縄文、平安時代）、法正谷遺跡（平安時代）、下堀工道満遺跡（古墳、平安時代）、美園町遺跡（縄文、平安時代）、腰巻遺跡（縄文時代）、咄戸遺跡（縄文時代）、咄戸沼遺跡（縄文時代）などが分布している。このうち、既往調査で住居址等が検出されているのは、下堀工道満遺跡（古墳、平安時代）である。なお、咄戸沼遺跡については今年度調査を実施した。



第18図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、堀工町字中山東 1615-2、1616-2 地内における個人専用住宅建設に伴う事前調査として実施した。

調査は、計画地の地形形状にあわせ南北方向に3本のトレンチを設定し、地下の状況を確認した。

調査地の現地地形は、南西側から茂林寺沼にむけて低くなっており、表土で約50cmの高低差がみられた。また、旧地形においても、ローム層で約50cmの高低差があることが確認された。

1 トレンチでは、地表から深度約30cmのところまでローム層がみられ、南側から土壌1基（縄文時代）が確認された。

2 トレンチでは、地表から深度約20cmのところまでローム層がみられたが、特筆する遺構等は確認されなかった。

3 トレンチでは、地表から深度約30cmのところまでローム層が確認された。また、トレンチ内の随所に遺構と思われる黒色土がみられたため、それぞれサブトレンチを設定し調査したところ、南側に土壌1基（時代不明）、中央に住居址1軒（古墳時代）、北側に住居址1軒（縄文時代）が、それぞれ確認された。

今回の調査では、1 トレンチから土壌1基、3 トレンチから土壌1基と住居址2軒が確認されたため、遺構等の取り扱いについて地権者と再度協議を行った。

協議の結果、現地表面上に盛土をし、工事で掘削深度が遺構に及ばないように対応することで合意を得たため、当該工事について支障はないと判断した。



写真19 調査前景



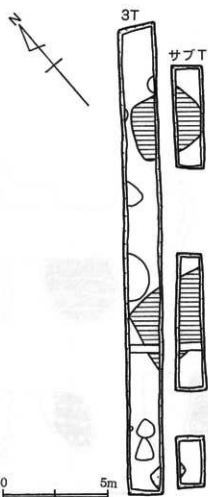
写真20 調査風景



写真21 トレンチ完掘(3トレンチ)



第19図 トレンチ配置図



第20図 トレンチ平面図



写真22 遺構確認状況(サブトレンチ)



写真23 遺構確認状況(サブトレンチ)

【出土遺物】

今回の調査で、出土した遺物は数十点である。そのなかで、実測、採拓したものを下記のとおり取上げた。

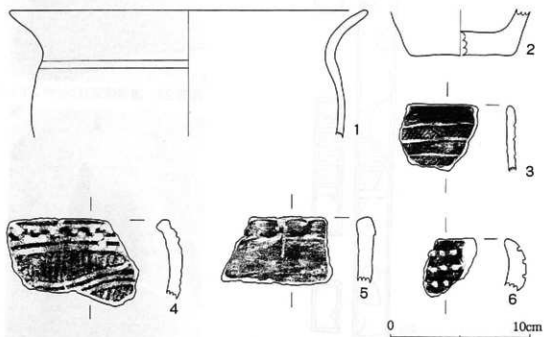
1は甕の口縁部の破片である。茶褐色をしている。

2～5は縄文土器の破片である。このうち、2は深鉢の底部片で、内側は黒灰褐色をしている。3は土器の口縁で、地紋の縄文を平行な沈線でご区画している。4は深鉢の口縁で、沈線と隆帯が区画されている。地紋は縄文である。5は口縁部である。

6は口縁部の破片であり、やや太い串状の工具による三条の刺突文がみられる。



写真24 出土遺物



第21図 出土遺物実測図

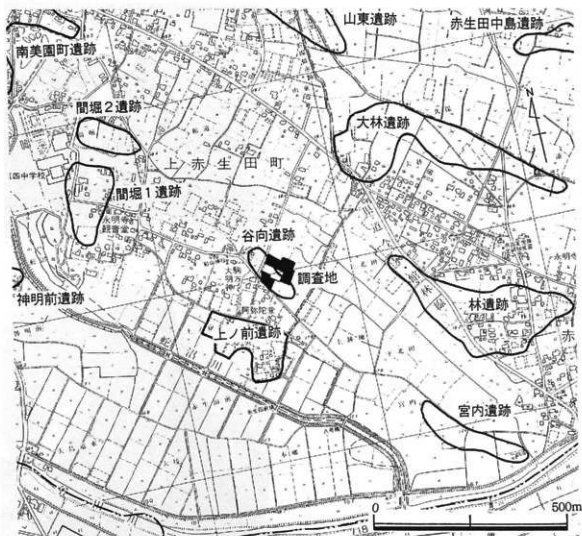
6 谷向遺跡A区(平14地点)

【立地と環境】

谷向遺跡は、館林市の南部、東北自動車道路館林ICの東方約2,000mに位置する古墳時代から平安時代にかけての遺跡である。

本遺跡における発掘調査は、これまでに例がなく、今回の調査地は、遺跡範囲の中央部に位置している。地形的には、邑楽・館林台地の南部で、蛇沼から谷田川方向へのびる開析谷の北岸に臨む低台地上に位置している。遺跡地の現在の標高は約18mで、周辺の低地(蛇沼川)との標高差は約2mである。

本遺跡の周辺には、同じ台地上に、上ノ前遺跡(縄文時代)、間堀1遺跡(縄文時代)、間堀2遺跡(縄文、平安時代)、宮内遺跡(縄文、古墳、平安時代)が分布している。このうち、既往調査で住居址等が検出されているのは、間堀1遺跡(縄文時代)である。なお、上ノ前遺跡については今年度に、宮内遺跡については昨年度、一昨年度に調査を実施した。



第22図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、谷田川北部土地改良事業に伴う事前調査として実施した。

本調査に至るまでの経緯は、前述のとおりである（2神明前遺跡参照）。

今回の調査では、当該遺跡に既往の発掘調査例がないことを踏まえ、遺跡の保存状態、遺跡の範囲、遺構等の有無などの確認を目的とした調査を行った。

調査は、該当する調査地内（上赤生田町字谷向 3556 ほか3筆）に合計8本のトレンチを設定し、地下の状況を確認した。

調査地の現地地形は、ほぼ平坦な地形ではあるものの、南西から北東に向け低くなっており、表土で約 10cm の高低差がみられた。また、旧地形においては、ローム層で約 40cm の高低差があることが確認された。

1～4 トレンチでは、表土下約 30cm のところでローム層を確認することができた。特に、2 トレンチでは過去において小型重機等で掘削などが行われた形跡がみられた。

5 トレンチでは、表土下約 50cm のところでローム層を確認することができ、トレンチ内の北側からは地下水が常時湧き出てくる状況であった。

6～8 トレンチでは、表土である耕作土層（約 30cm）の下は、過去において天地換え等が行われた可能性があり、粘土を含む攪乱層になっていた。約 120cm を超える掘削によっても、これらのトレンチからはローム層を確認することはできず、トレンチ内全面にわたり常時地下水が湧き出てくる状況であった。

今回の調査では、特筆すべき遺構、遺物等は確認されなかったため、土地改良事業の執行について支障はないと判断した。

【出土遺物】

今回の調査において、特筆する出土遺物は検出されなかった。



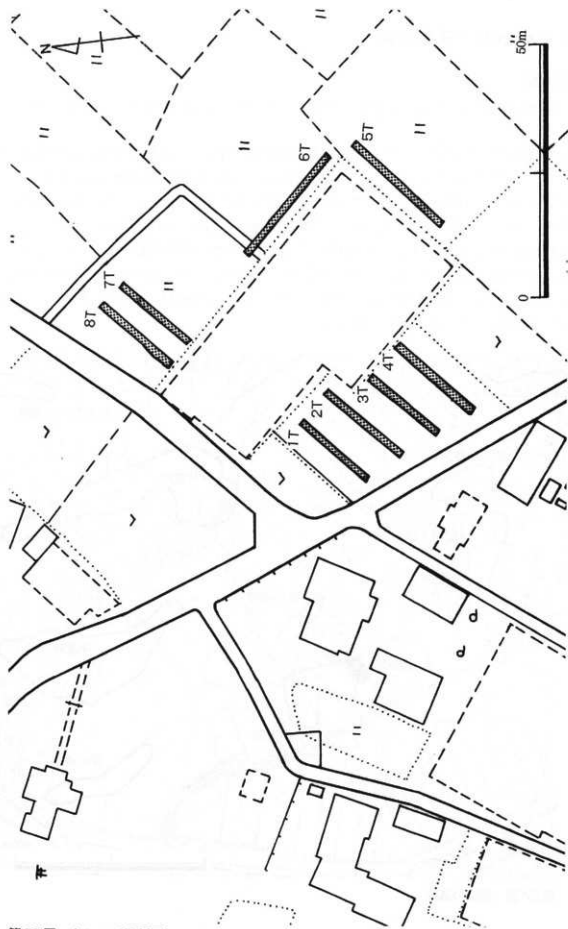
写真25 調査地景観



写真26 調査風景



写真27 トレンチ完掘(3トレンチ)



第23図 トレンチ配置図

7 上ノ前遺跡 (平14地点)

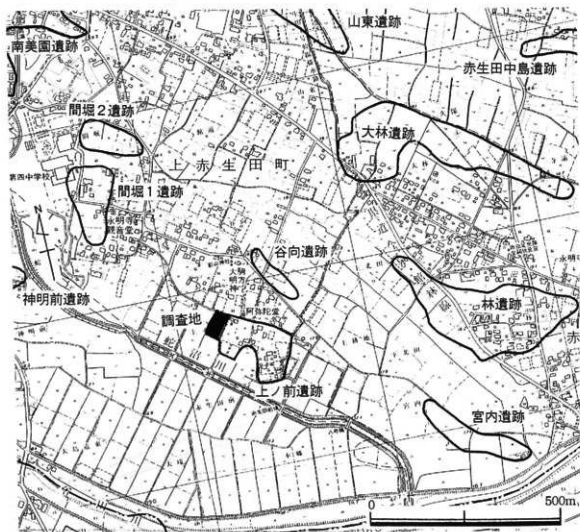
【立地と環境】

上ノ前遺跡は、館林市の南部、東北自動車道路館林ICの東方約2,000mに位置する縄文時代の遺跡である。

本遺跡の発掘調査は、過去に一度行われており(昭和60年度)、その調査では特筆する遺構等は確認されていない。今回の調査地は、遺跡範囲の北西部に位置し、昭和60年度調査地点の北西にあたる。

地形的には、邑楽・館林台地の南部で、蛇沼から谷田川方向へのびる開析谷の北岸に臨む低台地上に位置している。遺跡地の現在の標高は約18mで、周辺の低地(蛇沼川)との標高差は約2mである。

本遺跡の周辺には、同じ台地上に、谷向遺跡(古墳、平安時代)、間堀1遺跡(縄文時代)、間堀2遺跡(縄文、平安時代)、宮内遺跡(縄文、古墳、平安時代)が分布している。このうち、既往調査で住居址等が検出されているのは、間堀1遺跡(縄文時代)である。なお、谷向遺跡については今年度に、宮内遺跡については昨年度、一昨年度に調査を実施した。



第24図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、谷田川北部土地改良事業に伴う事前調査として実施した。

本調査に至るまでの経緯は、前述のとおりである（2神明前遺跡参照）。

今回の調査では、当該遺跡に既往の発掘調査例がないことを踏まえ、遺跡の保存状態、遺跡の範囲、遺構等の有無などの確認を目的とした調査を行った。

調査は、該当する調査地内（上赤生田町字上ノ前3348）に1本のトレンチを設定し、地下の状況を確認した。

調査地の現地形は、北東から南西に向けて低くなっており、現地形、旧地形ともに約10cmの高低差であることが確認された。

トレンチは、表土下約20cmのところまでローム層を確認することができた。

今回の調査では、特筆すべき遺構、遺物等は確認されなかったため、土地改良事業の執行について支障はないと判断した。

【出土遺物】

今回の調査地からは、特筆する遺物は検出されなかった。



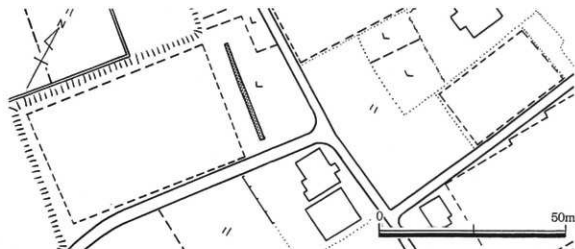
写真28 調査前景観



写真29 調査風景



写真30 トレンチ完掘



第25図 トレンチ配置図

《参 考 文 献》

- 館林市教育委員会 『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集～第37集
- 館林市教育委員会 『茂林寺沼及び低地湿原調査報告書』第2集(1986)
- 館 林 市 『館林市誌・歴史篇』(1969)
- 館 林 市 『館林市誌・自然篇』(1966)
- 館林市立図書館 『館林双書』第1巻～第28巻
- 群 馬 県 『群馬県史資料編1 原始古代1 旧石器・縄文』(1988)
- 群 馬 県 『群馬県史資料編2 原始古代2 弥生・土師』(1990)
- 群馬県林務部 『群馬県の貴重な自然・地形・地質編』(1999)
- 群馬県教育委員会 『群馬県遺跡台帳・東毛編』(1971)

抄 録

ふりがな	たてばやししないいせきはつつちょうさほうこくしょ							
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	_____	巻次	_____					
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書	シリーズ番号	第38集					
編集者名	打木洋輔	編集機関	館林市教育委員会					
所在地	〒374-0018 群馬県館林市城町1-1							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北近藤第一地点	苗木町字北近藤	1207	53	—	—	2002 2002	192.00	鉄塔建設
神明前	堀工町字神明前	1207	112	—	—	2002 2002	1,319.00	ほ場整備
咄戸沼	堀工町字咄戸沼	1207	109	—	—	2002 2002	1,090.00	ほ場整備
大袋4	桶町字下志柄	1207	73	—	—	2002 2002	2,446.00	保育園建設
中山東	堀工町字中山東	1207	103	—	—	2002 2002	713.00	個人住宅
谷向	上赤生田町字谷向	1207	115	—	—	2003 2003	3,959.00	ほ場整備
上ノ前	上赤生田町字上ノ前	1207	114	—	—	2003 2003	2,532.00	ほ場整備
遺跡名	種別	時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
北近藤第一地点	集落跡	縄文・古墳・平安		古墳時代後期住居等		土器片等		
神明前	包蔵地	縄文・奈良～平安		古墳時代中期住居		土器片等		
咄戸沼	包蔵地	縄文		なし		なし		
大袋4	包蔵地	縄文・平安		縄文時代住居等		土器片等		
中山東	包蔵地	平安		縄文時代中期住居等		土器片等		
谷向	包蔵地	古墳～平安		なし		なし		
上ノ前	包蔵地	縄文		なし		なし		

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第38集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発 行 館 林 市 教 育 委 員 会
印 刷 所 オ ー ラ 印 刷 有 限 会 社
発 行 年 月 日 平 成 1 5 年 3 月 3 1 日



文化財愛護シンボルマーク
故郷の文化と歴史をみなおもう